

きみはともだち

泪橋カオルコ

園から三十分ほどかけて出かけるバスハイクは、四月に入園した子供たちにとって最初の大きな行事だ。

いちごがたくさんなっているところに行くのよって、昨日の夜にお母さんが教えてくれた。好きなだけとって食べていいと聞いて、裕介は昨日の夜からずっとドキドキしている。朝になって目が覚めて、ベッドの隣の窓を見上げたら空いっぱい青が目飛び込んできて、そうしたらまたドキドキがはじまった。今日は生まれて初めてのいちごがりだってことを、思い出したからだ。

ドキドキはずっと止まらない。ご飯を食べているときも、園服に着替えておかあさんが黄色いお帽子を頭に乗せたときも、ずっと、ずーっとだ。

園の前の道からバスに乗る。裕介のとなりにはみかこちゃんが座った。

みかこちゃんは、いつも裕介のことをのんびりやだつて言う。お昼寝のおふとんを用意するとき、ゆうちやん早くしなよって、裕介の場所を勝手に隣に決める。そういうとき裕介は、ちよつとうるさいなって思ったりもするけれど、だいたいみかこちゃんの言うとおりに、隣に布団を並べて敷く。みかこちゃんはにんきものだから、みんなみかこちゃんの隣になりたがるのに、みかこちゃんが裕介を呼ぶものだから、裕介がまるでみんなの中心にいるみたいになる。それは、寂しくないからいいなって思う。一人ぼっちのお昼寝は、きつと寂しいと思う。

「ゆうちゃん、いちごがりつてしつてる？」

向こう側のお席のお友達とお話してたみかこちゃんが、急に裕介の方をむいて言った。

「しつてるシヨ」

「ほんとう？ いっぱい食べられるんだって。ほんとかな？」

「そうシヨ。好きなだけ食べていいんだって、おかあさんがいつてたシヨ」

「わあ。そうなんだ。ゆうちゃんいちごすきう。」

「すきシヨ」

くだものはなんでも好きだけれど、いちごの赤い色を見ると、すこくおいしそうで、すこく食べたくなつて、口の中がじわつといたくなる。

「ふうん。じゃあみかこがたくさんよってゆうちゃん

にあげるから、いちごがり一緒にしようね」

みかこちゃんはその言つて、ゆうすけの右手を持つて、きゆうつてした。

うれしいけど、いいのかな。好きなだけとつていいけど自分でたべられる分だけにしておくのよつて、おかあさんは言つてた。みかこちゃんはまた、裕介がのんびりやだからたくさん取れないと思つて、それでお手伝いしてくれるのかも。

おかあさんたちは別のバスだ。今日はいちごがりが終わつたら、そのままお帰りなんだつて。裕介は、おかあさんといちごがりが出るのかなつて思つていたから、ちがうつて聞いて、ちよつとつまらないなと思つた。

お友達みんながいて、そこにおかあさんもいるのつて嬉しい。おかあさんにお友達をおしえてあげたいなつて思う。裕介はまだ、お友達におうちに遊びに来てもらったことがないから、おかあさんはきつと、よかつたねつて言うと思つう。

バスがとまつた。裕介は窓のふちに指をかけて、鼻の頭とおでこをガラス窓にくつつける。白くてまるい、

ビニールハウスの屋根がぼこぼこたくさんならんでる。

ばらぐみさん行きますよつて先生の声が聞こえて、声のしたほうを見ると、ばらぐみの旗がパタパタしているのが見えた。みんなが順番に並ぶ。裕介も、とことと急いで近づいて、後ろに並んだ。

幼稚園のバスはぜんぶで六台だ。子供たちのバスと、おかあさんたちのバスがあつて、そのむこうに、違つたバスが三台ならんでる。あのバスのひとたちもいちごがりにきたのかな、と裕介は思う。バスからおりてくるのは裕介たちと同じくらいの年ごろの、違つた幼稚園の子たちみだつた。

裕介はちよつとつまらない気持ちになつた。裕介とお友達のみんなだけでいちごをたべられると思つたのに、ほかの幼稚園の子がいたら、お友達のみんなのたべる分がへちやうかもしれない。それに、知らない子がたくさんいるところに行くのは嫌だなつて思う。おかあさんに言つたらきつと、みんなで仲良く分けつこしなないとダメでしようつて言うから、だまつてるけど。

ばらぐみとすみれぐみのみんなは先生についてきてください。

うめざわ先生がばらとすみれの花がかいてある旗をふってみんなを呼んだ。ゆうちゃんいくよって言つて、みかこちゃんが手をつないでくれる。裕介はかけっこがあんまり速くないから、足が速いみかこちゃんについていくのは大変だ。

ビニールハウスの中に入ると、あまい匂いがして、裕介は胸がいっぱいになった。いちごだ。真ん中の道を通っていくと、両脇には縦にいちごの畑が並んでる。あなたたちはこの列よ、って先生が言った。ここつて言われたところに入って、奥にむかつて歩いていくと、右側も左側もいちごの畑だ。ちょうど裕介の頭の高さあたり。赤くなったのや、まだ少し白いのや、大きいのも小さいのが、緑のくきの先にたくさんぶら下がっている。

「うわあ~~~~！」

裕介は目を真ん丸にした。お口もだ。いちごつて、こういうふうになってるんだ。葉っぱがあつて、くきが伸びて垂れ下がって、そのさきつぽに赤いのがくつ

ついているんだ。わあーわあー！ はじめて見た！

裕介はうれしくなつて、どンドン通路を進んでいく。「ゆうちゃん、たべた？」

みかこちゃんが大きいのをひとつもいでくれたので、裕介はもらった小さいプラスチックの箱にちよつとだけ入った練乳をつけて食べた。

ゆつくり噛むと甘い水分が口の中いっぱい広がった。やわらかい。あまい。おいしい。ジュースみたい。裕介はびつくりして、思わずみかこちゃんを見た。みかこちゃんは、おいしいねって言つて、もうひとつもいで、自分のお口の中に入れた。

ビニールハウスの中は、おひさまの明かりが眩しくて、いちごの赤い実も、緑の葉っぱも、つやつやと光っている。

裕介は近くにあつた大きな実に手を伸ばした。みかこちゃんがやつたみたいに、いちごの上のところをつまんで、くるんと上に向けてみる。

「あれ？」

みかこちゃんは、かんたんそうにじょうずに採つていたのに、うまくできない。くるんつて上を向くだけ

で、いちごはくつついたままだ。

「できないシヨ」

「こうやるんだよ」

みかこちゃんがやってみせてくれたけれど、裕介はやっぱり上手にできなかった。これじゃあいつまでたっても好きなだけ食べなんてできない。力任せに引つ張ってみようかと思つたけれど、くきが伸びる感じがするだけで、やっぱりだめだった。

裕介は手に持っていた練乳の箱を地面において、両手でもいでみることにした。右手でくきを持って、左手で実をひっぱる。そうしたら、なんとかとれた。けど、勢いが付きすぎて裕介の指からポロンとこぼれてしまった。

「あっ！」

いちごは地面に落ちて、ぺしゃってなった。

「あ〜」

「あ……」

どうしよう。落っこちてつぶれちゃつたシヨ。オレが上手にできなかったせいで、いちごがおかおが、かあーっと熱くなる。

「だじようぶ。みかこがもう一回とつてあげるよ」
そう言つてみかこちゃんがくれた。裕介は悔しかったり悲しかったりしたけれど、ありがとシヨ、と言つて受け取つて、それを口に入れた。

「もう一回やつてみようよ」

ほかのお友達もお手伝いしてくれたので、裕介は、今度は自分でちゃんといちごを採つて、食べることが出来た。みかこちゃんが、裕介のぶんの練乳を持っていてくれたので、そこにいちごをつける。あまい味が、もつともつとあまくなつた。

「おいしいシヨ。ありがとシヨ」

夢中になつてもいでいたら、だんだん上手になつてきた。裕介の不器用な指でも、いちごはポロンと採れて手の中に落ちてくれる。練乳は、つけたら味が変わつておいしいけど、つけなくても、甘い水分が口の中いっぱい広がって、すごくおいしい。

もう二度と落とさないようにしよう、と裕介は注意深く、ぎゅつと強く、いちごを掴む。そうすると今度は力が入りすぎて、いちごが潰れてしまう。

(つぶれてもいいシヨ。おっこちるよりいいシヨ)

大事に口の中に入れて味わう。目に入る大きな赤い実をいくつももいで、次々に放り込む。

潰れたいちごから出た汁で手のひらが赤くなっているし、口の周りもべたべたする。でも裕介は、一生懸命いちごを食べた。食べ続けた。上手にもげるようになって、すごく嬉しかった。

「おまえ、きたないぞ」

口の中のいちごをもぐもぐと噛んでいたら、いつの間にか、目の前に知らないやつが立っていた。

誰シヨ、つて言おうと思つたけれど、口の中がいちごでいっぱいだったので、裕介はもぐもぐしながら黙つてその子を見た。

大きな目と、きりつとした眉毛。眉毛は、ちよつと怒つたみたいに真ん中によつてる。

（きたないつて言つたシヨ）

裕介は周りをきよろきよろ見渡してみた。みかこちゃん、ほかの女の子といちごを採つてる。男の子は、裕介の近くには誰もいなかった。

（これ、誰シヨ）

もう一回、裕介は頭の中で思った。

「どうやってたら手も口もそんなに汚れるんだ。おかしいだろ？」

裕介はもぐもぐしていたいちごをこつくと飲み込んで、やつとお口をひらいた。

「お、おまえ誰シヨ」

「オレか？ オレは、とうとうじんばち、という。山野幼稚園のゆりぐみだ」

やっぱり、全然知らない子だ。知らない子にこんな風に話しかけられたことがなかったので、裕介はびっくりして、顎をぐつと引いて後じさる。

「水場へいこう。あつちにあつたぞ」

とうとうじんばちは、裕介のよ、これしていない手首をにぎつてぐいと引つ張る。裕介たちが割り当てられたいちごの畑を抜けて、大きい通路に出ると、ずんずんとまっすぐ歩いていく。

「おまえ、名前はなんていうんだ？」

「ど、ど、ど、ど、どシヨ！ だめシヨ！ かつてにちがうところいったら怒られるシヨ！」

とうとうじんばちはピタリと足を止めて、クルンと振り返ると、ちよつと怖い顔になつてもう一度言った。

「名前」

「ま、まきしまゆうすけ」

「なに幼稚園のなにぐみ？」

「は、原野幼稚園シヨ。ばらぐみシヨ」

そこまで聞いて、ニッコリと笑ってうなずく。

「まきちゃんか」

裕介は、「はア？」と思った。思ったけれど、あんまり驚いたので声が出なかった。ゆうすけって言ったのに。

「まきちゃんてなんシヨ」

「まきしまだからまきちゃんだろ？ ほら、水道たぞ。

水を出してやろう」

大きい通路の突きあたり。トタンの壁の前に石の水盤がおいてあった。とうとうじんばちが上のところを捻ると、水がばしやばしやと勢いよくとび出した。

「わあ！」

石で水が跳ねて、裕介と、とうとうじんばちの足のところがびしょびしょになった。

「はやくあらえ！」

とうとうじんばちは、裕介の手首を掴んで前に押し

出すみたいにした。水の下に、赤くなつた手を入れる。

「くちもあらえよ。ハンカチはもってるのか？」

ハンカチはスモックの左のポケットに入っている。裕介がもぞもぞと体を揺らして手をさまよわせると、それに気づいたらしく、とうとうじんばちがポケットに手を入れて取り出してくれた。

「あ、ありがとシヨ」

口の周りを水で流してからハンカチをうけとる。手と口をふくと、何となくさっぱりした。

「きれいになったな」

「シヨ」

「ではもどるぞ！」

とうとうじんばちはまた裕介の手を掴むと、元の場所にもわかつて走り出した。

「と、とうとうじんばち」

思わず名前を呼んでしまつて、裕介はびっくりして立ち止まった。つられて、とうとうじんばちも立ち止まる。

「なんだ？」

「ひとりであるけるシヨ！」

だいたい、なんで知らないやつにいろいろ言われなきやいけないシヨ!

なんだかおなかの底がグルグルして、わーっと大きな声を出したいような気持ちだ。

「おまえ、みどり町の大きい家の子だろ? 公園の近くの」

知らなくないぞ、と言って、とうとうじんばちは笑った。そして、ここに座つてろ、と大きい通路におかれた木でできたベンチをゆびさした。

どうしようかなと思つたけど、さつき一生懸命になつてたくさん食べたせいで、裕介のおなかはたふたふだった。手を当てるとパンパンに膨らんでいる。

「もうはいらぬシヨ……」

座つたら、胸までいっぱいになっているみたいで、ちよつとくるしい。

「ほら持つてきたぞ。食べろ。お前がとつていた畑のとは違う種類のやつだぞ」

とうとうじんばちは、裕介たちがいた畑と通路を挟んだ真向いで、やつぱりいちごがりをしていたみたいだった。来た時に見たたちがう幼稚園のバスの子だと、

裕介はその時はじめて気がついた。

とうとうじんばちは、どうして裕介のことを知っているんだらう。

裕介の家は、みどり町の公園の近くで、いちばん大きいおうちだ。ゆうすけくんのお家は素敵ねえって、先生に言われたことがあるし、知らない人が裕介のお家を知っていたことは、何回もある。

なんでか知らないけど有名シヨって、裕介は思っていた。それはちよつと嬉しいことだった。

でも、とうとうじんばちが裕介のお家を知っているのに、裕介はとうとうじんばちのことなんかぜんぜん知らない。

(なんでシヨ……)

椅子は裕介には少し高く、足が届かなくてブラブラする。裕介は柱の時計を見た。三十分ですよって、先生が言っていた気がする。

周りを見渡すと、知っている子があんまりいなかった。

「シヨ……?」

もしかして、おいて行かれちゃったのかも。なんだ

か心細くなつて、しんぞうが水にぬれたみたいに冷たくなつた。なみだがでて、おめめがちよつとぬれた。

「またせたなまきちゃん。……どうした？」

そのとき、裕介がどんな顔をしていたのかはわからない。けれどとうとうじんばちは、それで全部わかつたみたいにならずくと、こつちだ、と言つて、また裕介の手首をにぎつた。

「ほら、つれていつてやる。これを食べてげんきを出せ」

そう言つたとうとうじんばちのゆびに、赤い実がひとつきらめいている。

握られていない方の手を伸ばすと、

「せつかく洗つたのにまたよこれるぞ」

と言つて、それから、

「くちをあける」

と言つた。裕介は、それもそうかと思つて、おかあさんがときどきしてくれるみたいに、あーん、とお口を開けた。

ころりと飛び込んできたいちごは、今日食べた中で一番甘くて、とろけそうにやわらかかつた。

うまいだろう、と言ふのに頷くと、とうとうじんばちは、ワツハツハ、つて、大きい声で笑つた。とうぜんだ。オレがとつたいちごがうまくないわけがない。変な子だなあ、つて思う。だけど、全然いやじゃないから、裕介も変なのかもしれない、とも思う。

お外に出ると、みかちゃんが大きい声で、「ゆうちゃんこつちー！」つて呼んでいた。どこに行つたの。だめでしょ。みかこちゃんのうしろで、おかあさんが先生と並んでここにこ笑つてる。

「おまえのおかあさんか？」

とうとうじんばちが言つた。裕介は、うん、とうなずく。

とうとうじんばちはおかあさんのところまで裕介の手を引いてつれて行く。とぼとぼと引つ張られるまま歩いていくと、おかあさんがにっこりわらつて、まあお友達ができたの？ つて言つた。裕介が、おともだち？ つて首をかしげている間に、とうとうじんばちは、はい！ つて大きい声でいいお返事をして、それから、とうとうじんばちです！ つて言つた。

そして、こんど遊びにいらっしやいつてお母さんが

言ったせいで、次の日曜日に、とうとうじんばちは本
当に遊びに来た。

だから、裕介のお家に初めて遊びに来たお友達は、
みかちゃんでも、園のお友達の誰でもなく、とうど
うじんばちだ。

裕介はすぐに、とうとうって呼ぶようになった。

やがて小学校に上がって漢字を覚えて、とうとうじ
んばちは、東堂尽八と書くのだと知って、裕介のとう
どろは、東堂になっていくのだけれど、それはもう少
し先のお話。